

日本學報 別冊

第59輯・pp.89~102

認知主体の把握の仕方と格助詞ニの多義構造について

—認知言語学的観点から—

森山新

morishin@cc.ocha.ac.jp



韓國日本學會

2004. 6.

<http://kaja.or.kr>



# 認知主体の把握の仕方と格助詞ニの多義構造について

— 認知言語学的観点から —

森山新\*  
morishin@cc.ocha.ac.jp

## <要 旨>

認知主体である人間は、外界を認知するにあたって、事態をプロセスとして動的に把握するか（プロセス的把握）、または非プロセスとして静的に把握するか（存在論的把握）のいずれかを選択している。

これら「プロセス的把握」、「存在論的把握」の双方に、認知主体の見え（perspective）との関わりの弱い「客観的把握」と、認知主体の見えが色濃く反映した「主観的把握」という把握の仕方が関与している。「移動の着点」、「存在の位置関係」の用法が「客観的把握」の用法であり、「移動の起点」、「経験の主体」用法が「主観的把握」となっている。

したがって「移動の着点」用法はプロセス的客観的用法で、「移動の起点」用法はプロセス的主観的用法であり、「存在の位置関係」用法は存在論的客観的用法で、「経験の主体」用法は存在論的主観的用法である。

このように格助詞ニの多義性には認知主体が事態をどのように把握するかということが関わっている。またニが着点・起点といった動的な用法と、単なる存在という静的な用法がある理由や、着点的な用法と起点的な用法とがある理由は、認知と言語との関係、すなわち人間の把握の仕方がどのように言語化に反映されるのかといった点からうまく説明することができる。

キーワード：格助詞、ニ、放射状カテゴリー、把握、認知言語学

## 1. はじめに

格助詞ニは(1)~(10)のように、授与や動作の相手を表す用法、何らかの移動の着点を表す用法、授与や動作の主体を表す用法、原因を表す用法、位置や時間を表す用法、所有や知覚などの主体を表す用法など、多くの意味用法を有している。

- (1) 友だちに本をあげる。（授与の相手）
- (2) 学生に日本語を教える。（動作の相手）
- (3) 机の上に本を載せる。（移動の着点）
- (4) 友だちに本をもらう。（授与の主体）
- (5) 先生に日本語を教わる。（動作の主体）
- (6) 台風之家を飛ばされる。（原因）
- (7) 机の上に本がある。（位置）
- (8) 10時に家を出る。（時間）
- (9) 私に子供がある。（所有の主体）
- (10) 私には富士山が見える。（知覚の主体）

\* お茶の水女子大学 助教授

移動の方向性という点に注目して考えると、(1)~(3)のように移動の「着点」を表すものや、(4)~(6)のように「起点」を表すもの、さらには(7)~(10)のように移動が認めにくいものなどが存在する。また移動が認めにくいものの中には、(7)、(8)のように空間的位置や時間的位置など、何らかの位置を表すもののほか、(9)、(10)のように所有、知覚など、何らかの経験の主体を表すものなどが存在する。したがって格助詞ニの意味用法は①移動の着点、②移動の起点、③存在の位置関係、④経験の主体という4つのカテゴリーに大別することができる。しかしながら認知言語学の観点からの先行研究を見ると、次章で示すように「着点」を共通の意義素としたり、プロトタイプと考えたりするものがほとんどで、「着点」のみに関心が向けられているという点において、その分析には問題を内包していると言わざるをえない。

認知言語学的な観点からすれば、多義語の様々な意味用法は、プロトタイプを中心として、あるスキーマを共有しつつ一つのカテゴリーを形成していると考えられる。多義語の様々な意味用法は、何らかの動機づけに基づいてプロトタイプからの拡張によって生じたものであると考えられることができる。

本稿では格助詞ニが何ゆえこのような意味の多義構造を持っているのかについて考察することを目的としているが、このような考察を行うにあたり、認知言語学の観点、とりわけ認知主体の把握の仕方との関係からの分析が有益であるとの考えから、格助詞ニの多義構造と認知主体の把握の仕方との関係について述べたものである。

## 2. 先行研究

言うまでもなく格助詞ニは機能語の一つである。従来言語学の見解の中には語を内容語と機能語に分類し、機能語には意味はないという見解もある。しかし認知言語学では「すべての言語構想は記号的である」ことを前提として、すべての言語形式には意味があるとの考えを持っており、そのため格助詞のような機能語にも意味があるという立場をとっている (Langacker 1991a: 282, a991b: 209)。

ニ格の意味用法に関する研究は多いが、このうち認知言語学的観点から多義語としての意味構造に触れたものとしては、国広 (1986)、堀川 (1988)、杉村 (2002)、菅井 (2000, 2001)、森山 (2001a, 2001b, 2003) などがある。

国広 (1986) では、ニに「密着の対象を示す」という意義素を仮定している。これは「一方方向性を持った動き」と、「その動きの結果密着する対象物あるいは目的」とで表される全体を表しているとしている。しかし現代語のニの「人になぐられる」、「人に教えてもらう」などの表現では、別の意義素を認めざるをえないことも語っている。

堀川 (1988) では、ニの意義素を「着点性」のものに限定する立場をとっている。(11)~(14)のようにニが「起点」的な意味を有する場合もあるが、その場合にも、ニは「密着の対象を表わす」がゆえに、「着点」の意味を共有するとしている。さらに杉村 (2002) はこの堀川(1988)の立

場を踏襲しつつも立場をやや異にし、「着点」がプロトタイプ的な意味であるとしている。

- (11) 太郎は次郎に殴られた。
- (12) 太郎は花子にプレゼントをもらった。
- (13) 太郎は花子に部屋を掃除してもらった。
- (14) 太郎は持病に苦しんでいる。

ここで「密着」とは何かというと、(11)~(14)においてガ格は能動性が低く(受動性が高く)、自らだけでは動作が成立しないことから、動作を引き起こすもの(ニ格)に「密着しなければ動作が成立しないという」性質をさしているという。

しかしここで何ゆえ、「能動性が低く(受動性が高く)、自らだけでは動作が成立しない」というガ格の性質をあえて「密着」という用語を用いて表現したのであろうか。それはニ格の「起点」用法の場合にも、ガ格が「ニ格に対する密着性」を持っていることを示し、ニ格の用法すべてに「着点」としての共通の意義素を見出そうとしたためである。しかしガ格のニ格に対する「密着性」は「受動的な密着性」であると考えたほうが自然である。だとすれば、ガ格はやはり「着点」であり、それに対峙するニ格は、「起点」となってしまう。

菅井(2000, 2001)でも、移動の点では着点の用法がプロトタイプであり、起点の用法は着点の用法からの拡張であるという立場をとっている。着点用法がプロトタイプである根拠として、例えば「花子が先輩に携帯電話を借りた。」のようなニが起点を表すような文においても、借りる前に先輩への花子の働きかけが先行しているように、起点用法の場合も「ガ格→ニ格」の働きかけが前提になっていることが述べられている。しかし「花子が先輩にプレゼントをもらった。」のような文では、必ずしも「ガ格→ニ格」の働きかけが前提になっているとは考えにくい。

森山(2001a, 2001b)では、Langackerの研究を参考にしつつ、ニ格はプロトタイプとして能動的参与者(経験主)、すなわち人(有情物)であり、ガ格とニ格との間にモノの移動があるが、その方向は基本的にガ格からニ格であるとしている。また森山(2003)ではニ格すべての用法が共有するスキーマに「着点」といったものを考える限界を認めて、「ガ格→ニ格」をニ格の用法すべてが共有する「スキーマ」と考えることはできず、「着点」という意味は単に「移動の方向性」の「プロトタイプ」と考えるべきであると述べている。そしてニ格用法のプロトタイプは「彼に手紙を送る」といったような与格の用法であり、ニ格の用法すべてが共有するスキーマは「ガ格に対する対峙性(独立性)」であるとしている。

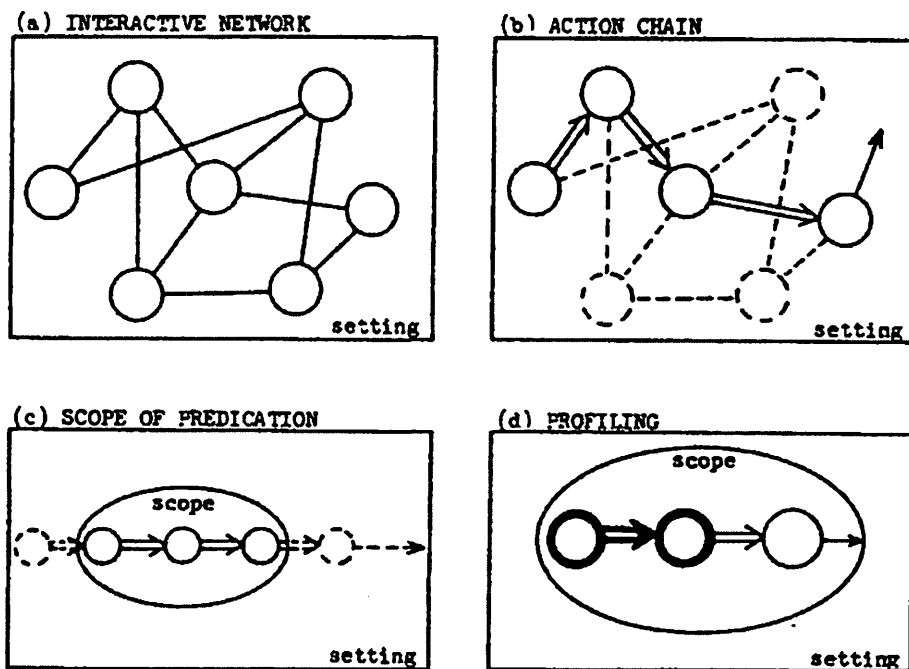
このようにこれまでの先行研究のほとんどでは、ニの様々な用法は、「着点」としての意味を何らかの形で共有しているとしているか、もしくは共有はしていないものの、プロトタイプであるとしている。

### 3. 格に対する認知言語学的観点

分析を始めるにあたり、まず、言語化に際して格の決定がどのようになされるかについての認

知言語学的な考えを整理してみたい。Langacker(1991a, 1991b)によれば、認知主体としての人間は、図1(a)のように人間をとりまく外的世界を様々なモノと関係のインターアクティブなネットワークで構成されていると見る<sup>1)</sup>。

図1 人間の外界認知のプロセス (Langacker 1991b : 215)



しかし人間は普通、(b) (c) のように、その中の1つの動力連鎖 (action chain) に関心を向け、その一部を切り取り (scope)、敘述の対象とし、(d) のようにそれをベース(base)<sup>2)</sup>として2つのモノ (参与者) とその関係をプロフィール (profile)<sup>3)</sup>する。

続いてこれが言語化される際には、図2のように、普通 (無標の場合) はプロフィールされた動力連鎖 (図2では太線で示されている) の最上流に位置するモノ (参与者) に「最大の際立ち (tr : trajector)」が与えられて認知され、言語化にあたっては主格で表され主語 (S) となる。またプロフィールされた動力連鎖の最下流のモノ (参与者) には「第二の際立ち (lm : landmark)」が与えられて認知され、言語化の際には対格で表され目的語 (O) となるとしている<sup>4)</sup>。

1) 後述するが、このような把握の仕方は事態に対し「プロセス的把握」をした場合である。  
 2) Langackerの認知文法の用語で、語の意味を得る際に、その前提として概念化されるもので、プロフィールされた部分に対して背景となる。例えば「斜辺」をプロフィールさせる時のベースは「三角形」である。  
 3) Langackerの認知文法における用語で、認知主体が語の意味を得る際に構造の一部に注目し焦点化させることを意味する。  
 4) トラジェクター(trajector)やランドマーク(landmark)はLangackerの用語で、参与者間の関係において、より際立つものの、すなわち図(figure)として機能するのがトラジェクター、図の基点として機能するものをランドマークという。典型的

また図3のように、他動的な動力連鎖の原型的 (archetypal) な参与者役割には、「動作主 (AG)」、「道具 (INSTR)」、「主題 (TH)」（被動作主 (PAT)、移動者 (MVR) など)、「経験者 (EXPER)」などがあるが、これらはそれぞれ「源泉領域の能動的参与者」、「源泉領域の受動的参与者」、「目標領域の受動的参与者」、「目標領域の能動的参与者」と特徴づけることができる。それらは無標の言語化に際して、各々、主格、具格、対格、与格で表されるとしている (Langacker 1991a : 327) 5)。

図2 人間の外界認知の言語化のプロセス (Langacker 1991b : 217)

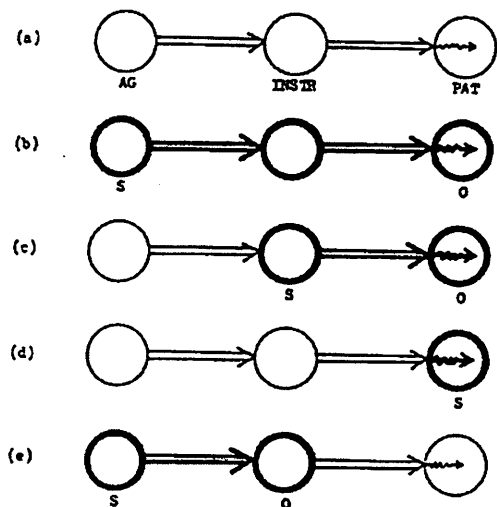
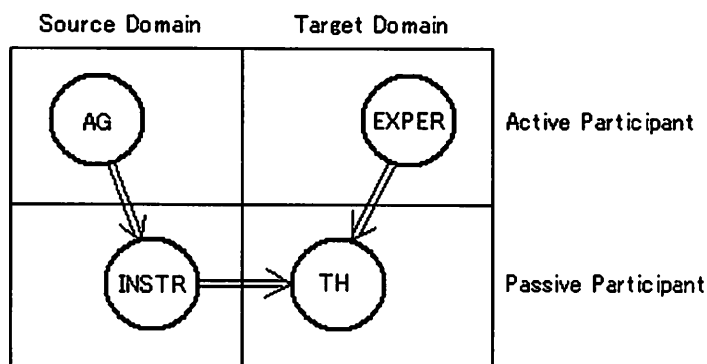


図3 他動性を持った動力連鎖とその参与者役割 (Langacker 1991a : 327)



には動詞の主語がトラジェクター、目的語がランドマークであるとしている。

5) 有標の言語化では格標示に変化が生じる。例えば無標の能動文では、動作主が主格、被動作主が対格で表されるが、有標の受動文では、認知主体の焦点の移動に伴い、被動作主が主格で表される。また日本語などでしばしば見られる主題化や省略などは、言語化に際してのこれらの慣習化された格標示を前提としてなされる。例えば「太郎は次郎を殴った。」(主格の主題化)や「次郎を殴った。」(主格の省略)は「太郎が次郎を殴った。」といった格標示を前提としている。

#### 4. 事態に対する把握の仕方と二格の放射状カテゴリー構造

本章では以上のような認知言語学的な観点を、日本語の格助詞の意味研究に応用し、格助詞ニが持っている「移動の着点」、「移動の起点」、「存在の位置関係」、「経験の主体」といった意味用法が、認知主体が事態をとらえる2通りの把握の仕方「把握のプロセス性」、「把握の主観性」によって生み出されたものであることを見ていく<sup>6)</sup>。

##### 4-1. 事態に対する2通りの把握の仕方

###### 4-1-1. プロセス的把握と存在論的把握

日本語には大別すると、事態をプロセス的に把握し言語化する場合と、事態を存在論的に把握し言語化する場合とがある。なお、本稿で用いられている「プロセス的(processual)」、「存在論的(ontological)」の用語は、菅井(2002)で用いられている「過程的構文 (processual construction)」、「存在論的構文 (ontological construction)」を大筋において踏襲している。

###### ①プロセス的把握 (processual perspective)

事態を動力連鎖による動的なプロセスとしてとらえるもので、格助詞ニの場合「移動の着点」、「移動の起点」の用法がこれに該当する。

###### ②存在論的把握 (ontological perspective)

事態をプロセスとしてではなく、存在論的に静的にとらえるもので、格助詞ニでは「存在の位置関係」、「経験の主体」の用法がこれに該当する。「存在の位置関係」用法は、本来存在論的な事態を客観的把握により存在論的にとらえるものであるが、「経験の主体」用法は、本来プロセス的な事態を認知主体の見えとして主観的にとらえた結果、存在論的にとらえられ、言語化されたものである。例えば「私が本を持っている。」という所有文は、認知主体(私)の見えとしては「(私に)本がある。」というように存在論的に把握、言語化され、存在文ともなる<sup>7)</sup>。

###### 4-1-2. 客観的把握と主観的把握

また事態はその主観性の程度により、より「客観的な把握」と、より「主観的な把握」とに区分できる。

###### ①客観的把握 (objective perspective)

6) 「把握のプロセス性」、「把握の主観性」という考え方は、認知言語学的な考え方に基づいているが、とりわけ前者は菅井(2002)、後者は池上(2000)の先行研究をヒントにしている。

7) 「存在論的把握」の場合には「プロセス的把握」とは異なり、「存在の位置関係」用法における存在物(ガ格)と存在場所(ニ格)との関係や「経験の主体」用法における経験対象(ガ格)と経験主体(ニ格)との関係は、いわば図 (figure) と地 (ground) の関係となり、存在物や経験対象は図として最大の際立ち (tr) が与えられる一方、存在場所や経験主体は地としての役割が与えられ、第二の際立ち (lm) が与えられることになる。なお図と地という用語はゲシュタルト心理学の用語、tr、lmはLangackerの用語である。



「認知主体が事態をどのようにとらえたか」といった主観的要素が反映されないように言語化されたもので、格助詞ニの場合には「移動の着点」、「存在の位置関係」の用法がこれに該当する。このうち「移動の着点」用法はプロセス的な事態をプロセス的に把握した場合であり、「存在の位置関係」用法は存在論的な事態を存在論的に把握した場合である。

## ②主観的把握 (subjective perspective)

客観的把握とは異なり、主観的把握は「認知主体が事態をどのようにとらえたか」といった主観的要素が何らかの形でより強く反映されて言語化されたもので、格助詞ニの場合には「移動の起点」、「経験の主体」の用法がこれに該当する。このうち「移動の起点」用法は、プロセス的な事態をプロセス的に把握したものである。プロセス的事態の把握においては、「移動の着点」用法の場合のように、動作主 (AG) など、動力連鎖の最上流の参与者に焦点が当てられてtrとなり、ガ格で表されるのが普通 (無標) であるが、「移動の起点」用法では、認知主体の何らかの動機づけにより、被動作主 (PAT) など、より下流に位置する参与者に焦点が向けられ言語化されるようになったもので、ここに認知主体の主観が反映されている。一方「経験の主体」用法では、客観的にはプロセス的な事態が、認知主体の見えとして存在論的に把握され、言語化されたところに認知主体の主観が反映されている。これらの場合では、本来ヲ格などで表されていたもの (被動作主、経験の対象など) が焦点化されてガ格で表される一方、本来はガ格で表されたもの (動作主、経験の主体など) が脱焦点化されてニ格で表されるようになる<sup>8)</sup>。

### 4-1-3. 事態に対する4通りの把握とニ格

このように事態の把握には、それをプロセス的に把握するか否かにより、「プロセス的把握」、「存在論的把握」があり、さらに把握の主観性により、それぞれに「客観的把握」、「主観的把握」があるため、結局4通りの把握の仕方を生み出し、それに対応する形でニ格には4種類の用法が存在している。

#### ①移動の着点：客観的、プロセス的把握

「移動の着点」の用法は、プロセス的な事態を客観的に、プロセス的な事態として把握したものである。この場合には図1が示すように、事態は参与者間の動力連鎖によって成り立つ動的なプロセスとしてとらえられ、それら参与者の意味役割が格として言語化され、項となり節を構成していく。その結果、図2のようにプロファイルされた動力連鎖の最上流に位置するモノ (参与者) がtrとなり主格 (ガ格)、最下流に位置するモノ (参与者) がlmとなって対格 (ヲ格) で表されるようになる (典型的には「動作主 (AG)」が主格、「被動作主 (PAT)」が対格となる)。与格 (ニ格) は図3のように、「目標領域の能動的参与者」として主格に対して対峙しつつ、(15)のような「授与」の場合にはモノの移動の着点、(16)のような「動作」の場合には動力移動の着点、(17)のような「移動」の場合にはモノや人の移動の着点といったように、何らかの移動

8) 柴谷方良などが、ある種の経験者主語はニ格であるとしているのも、これらのニ格が主観的把握による脱焦点化により、本来ガ格で表されていたものがニ格で表されるようになったということを考えてうまく説明がつく。

の「着点」として存在することになる。

また(18)は移動の着点が抽象化し、目的を表すようになったもので、「映画館に行く。」のような具体的な着点用法から派生したものであると考えることができる。

さらに(19)は「変化」を「移動」のメタファーとしてとらえたもので、「変化の結果」が「移動の着点」として把握されたものである。これも「移動の着点」用法からの拡張としてとらえることができる。

- (15) 友だちに本をあげる。(授与の相手)
- (16) 学生に日本語を教える。(動作の相手)
- (17) 机の上に本を載せる。(移動の着点)
- (18) 映画に行く。(動作の目的)
- (19) 一人前の大人になる。(変化の結果)

②移動の起点：主観的、プロセス的把握

「移動の起点」用法は、「認知主体のとらえ方(perspective)」といった主観性がより色濃く反映された形でプロセス的事態を把握したもので、焦点の移動が起こり、能動態の受動化、他動詞文の自動詞化など、言語化において変化が生じる。

受動文では、図4のように「動作主」など、プロフィールされた動力連鎖の最上流に位置し、本来最大の際立ちが与えられ (tr)、主格 (ガ格) で表されるものが、認知主体の特別(有標)な動機づけの結果として、「被動作主」など、動力連鎖のより下流の参与者に焦点が向けられ (tr)、主格 (ガ格) で表される。上流に位置する「動作主」や「原因」などは、日本語では二格で表されるようになる。その際、二格は、ガ格で表された参与者に対し「起点」として存在することになる。アゲルなどの授与動詞がモラウなどの受給動詞で表されるようになる語彙的ヴォイスの現象も同じようにとらえられる。

図4 能動文と受動文における動力連鎖の認知の仕方の違い



自動詞文では、他動的な事態の「主題 (TH)」部分に焦点が向けられてtrとなり、ガ格で表される一方、本来の動力連鎖の能動的参与者である「動作主 (AG)」は言語化されないか、二格で表される。その際、二格はやはり、ガ格で表された参与者に対し「起点」として存在することになる。

能動文の受動文化に関しては、前者が無標の把握であり、後者が有標の把握といえるが、他

動詞文の自動詞化に関しては、日本語は「主観的把握型」の言語と言われ（池上 2000）、  
「客観的把握型」の言語である英語などに比べれば、認知主体の主観が反映されやすく、他動  
詞文の自動詞化が起きやすい。

(20)は授与の対象（受領主）に認知主体の焦点が向けられた結果、授与の主体が二格で表さ  
れたもの、(21)は動作の対象（被動作主）に認知主体の焦点が向けられた結果、動作の主体が  
二格で表されたもので、前者の場合にはモノの移動の起点、後者の場合には動力移動の起点が  
二格で表されている。同様に(22)では被害者、(23)では被影響者に認知主体の焦点が向けられ  
た結果、それぞれの原因的な参加者は二格で表されている。これらの場合でも、二格で表された  
参加者は動力連鎖の起点となっている。

(20) 友だちに本をもらう。（授与の主体）

(21) 先生に日本語を教わる。（動作の主体）

(22) 台風にかを飛ばされる。（原因）

(23) 都会の絵の具に染まらないで。（原因）

### ③存在の位置：客観的、存在論的把握

事態を存在論的に把握した「存在の位置関係」の用法は、(24)～(27)のように、空間  
や時間、さらにはある座標上での位置関係を示す用法で、存在の主体がtrとしてガ格で表される  
のに対し、二格はその位置関係を示す基準点、すなわちランドマーク(lm)の役割を果たしてい  
る。両者の関係は図5のように、「ガ格の参加者を二格との関係によって位置づける」という関  
係である。例えば(24)では「本」を空間的座標上の「机の上」によって位置づけるという関  
係である(図5(a)参照)。また(25)は「彼が寝る」という事態を時間的座標上の10時とい  
う点によって位置づけるということを示している(図5(b)参照)。(24)や(25)では、ガ格  
は二格の存在そのものにより位置づけられているが、(26)ではガ格(わが家)は二格(学  
校)をlmとし、空間的座標上のある位置(近い位置)に位置づけられている(図5(c)参  
照)。また(27)ではガ格(この素材)が二格(熱)をlmとして強度の座標上のある位置(強  
い側の位置)に位置づけられている(図5(d)参照)。<sup>9)</sup>

(24) 机の上に本がある。（空間的位置）

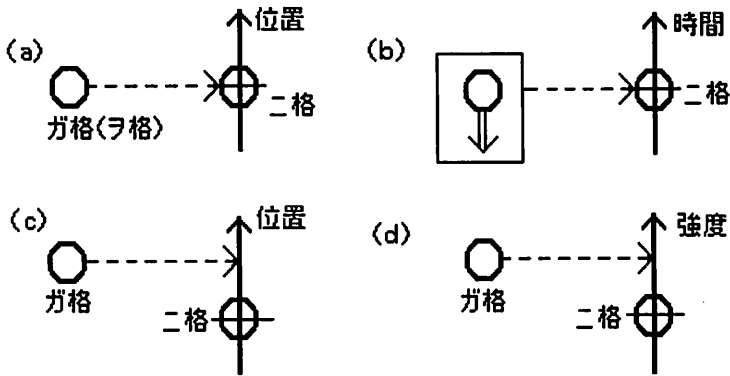
(25) 10時に家を出る。（時間的位置）

(26) わが家は学校に近い。（空間的位置のlm）

(27) この素材は熱に強い。（ある座標上のlm）

9) (26)や(27)では、trとlmの関係は形容詞「近い」、「強い」で表されている。

図5 「存在の位置関係」の用法のスキーマ



「存在の位置関係」の用法ではガ格からニ格への「移動」というものではなく、相互に静的に対峙する関係となっている。これには典型的な存在文である「アル/イル文」のほか、同定文、形容文なども含まれる。同定文、形容文が DEAL、QUAL など、アルを伴って表されることは、これらが存在文の一種であることを暗示している（金谷 2003）。

#### ④ 経験の主体：主観的、存在論的把握

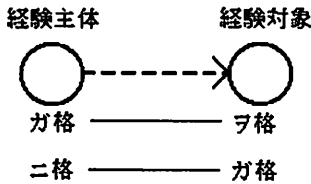
「経験の主体」の用法は、客観的にはプロセス的事態を、「主観的把握」の結果、存在論的に把握したものである。これは「主観的把握」が、事態を客観的にとらえるのではなく、「認知主体が事態をどのようにとらえたか」をそのまま言語化するためである。

例えば「所有」の事態を例にとると、「客観的把握」では、所有は参与者間の動力連鎖により成立するプロセスとしてとらえられる（例：「私は車を持っている。」、「彼は車を持っている。」）が、ある認知主体（人）の「見え」としては、参与者間の動力連鎖は見えず、存在の位置関係としてとらえられる（例：「（私には）車がある。」、「彼には車がある。」）ことになる。すなわち「客観的把握」というのは事態を参与者間の動力連鎖としてとらえ、それらを言語化するのに対し、「主観的把握」は事態を認知主体の「見え」としてとらえ、経験主体と経験対象との関係を存在の位置関係として言語化するため、存在論的に言語化することになるのである。

図6が示しているように、「客観的把握」によりプロセス的事態をプロセス的に把握した「移動の着点」用法では、プロフィールされた動力連鎖の最上流に位置するものがガ格で表されたが、「主観的把握」によりプロセス的事態を存在論的に把握した「経験の主体」用法では、認知主体の「見え」において最大の図（figure）として認知されたもの（経験対象）がガ格で表わされ、それに対峙して存在するもの（経験主体）がニ格で表わされるようになる。ここでニ格とガ格との関係は、動的なものではなく、認知主体によりとらえられた「位置づけの関係」（trであるガ格が、lmであるニ格によって位置づけられる関係）で、「存在の位置関係」を表す用法と同様

に単に静的に対峙する関係として存在している。

図6 経験的動作の事態と格標示



(28) はニ格の「所有の主体」の用法であるが、「私」の所有のドメインに所有の対象である「子供」が存在するという表現である。同様に (29) は「私」の知覚のドメインに知覚の対象である「富士山」が存在すること、(30) は「姉」の能力のドメインに能力の対象である「バイオリン」が存在すること、(31) は感情のドメインに感情の対象である「そのこと」が存在すること、というように考えることができる。その結果ガ格で表された経験の対象は、経験主体が持つ「所有」、「知覚」、「能力」、「感情」といった主観的な場 (ドメイン) における「存在」として位置づけられている (この点についての詳細は菅井(2000)を参照)。

- (28) 私に (は) 子供がある。 (所有の主体)
- (29) 私に (は) 富士山が見える。 (知覚の主体)
- (30) 姉に (は) バイオリンが弾ける。 (能力の主体)
- (31) 私に (は) そのことがうれしい。 (感情の主体)

## 5. まとめ

本研究で考察してきた内容をまとめると以下のようになる。

認知主体である人間は、外界を認知するにあたって、事態をプロセスとして動的に把握するか (プロセス的把握)、または存在として静的に把握するか (存在論的把握) のいずれかを選択している。

これら「プロセス的把握」、「存在論的把握」の双方に、認知主体の見え (perspective) との関わりの弱い「客観的把握」と、認知主体の見えが色濃く反映した「主観的把握」という把握の仕方が関与している。「移動の起点」、「経験の主体」の用法では、それぞれ「移動の着点」、「存在の位置関係」の用法に比べ、認知主体の見えが色濃く反映した「主観的把握」となっている。以上をまとめると表1のようになる。

表1 2通りの把握と二格の意味との関係

	プロセス的把握	存在論的把握
客観的把握	移動の着点 (プロセス的事態)	存在の位置関係 (存在論的事態)
主観的把握	移動の起点 (プロセス的事態)	経験の主体 (プロセス的事態)

日本語の格助詞ニが着点・起点といった動的な用法と、単なる存在という静的な用法がある理由や、動的な用法に着点的な用法と起点的な用法という相対立する用法が存在する理由は、認知と言語との関係、すなわち人間の把握の仕方がどのように言語化に反映されるのかといった点からうまく説明することができる。すなわち格助詞ニの多義の背景には、日本語が事態に対し、「プロセス的把握」をする場合と「存在論的把握」する場合とがあること、「客観的把握」とともに「主観的把握」がなされやすい言語であることの2つも原因となっているのである。

最後に事態の把握の仕方に関して日本語と英語とを対照してみる。表1で、「移動の着点」と「移動の起点」の用法は、日英両語ともプロセス的事態がプロセス的に把握され、言語化されている<sup>10)</sup>。また「存在の位置関係」の用法も、日英両語で存在論的事態が存在論的に把握され、言語化されている。問題となるのが、プロセス的事態としての経験的動作をどのように把握し、言語化するかという点である。この点で日英両語は把握の仕方を異にし、その結果言語化の仕方に差が生じている。すなわち英語では「客観的把握」をして、「プロセス的」に表現することが多いが、日本語ではむしろ「主観的把握」をして、「存在論的」に表現することが多い(西村 2000)。

経験的動作というものは、経験主体と経験対象との間に展開される客観的な動力連鎖を考えた場合、プロセス的事態であるとはいえ、他動性が希薄であり、具体的な動力連鎖といったものも存在しない(Langacker 1991a, 1991b)。従ってプロセス的事態としては最も存在論的事態に近い周辺的な事態である。

一方経験的動作を経験主体の立場から主観的に見た場合には、経験対象だけが存在し、経験主体としての自己は、「自己の客体化」といった手続きをしない限り、客観的存在とはなりえない。具体的に言えば、「私が車を所有している」という事態は、私の立場からは単に「車がある。」ということであり、所有主としての自己を客体化してはじめて所有者としての自己が把握され、「私に(は)車がある。」ということになる。知覚も同様で、「私が富士山を見る」という事態は、私の立場からは単に「富士山が見える。」ということであり、自己を客体化してはじめて「私に(は)富士山が見える。」ということになる<sup>11)</sup>。能力主体、感情主体としての用法も同様

10) 但し前章で述べたように、日本語の場合は英語に比べると他動詞文の自動化など、「主観的把握」用法である「移動の起点」用法が相対的に多くなるという違いはある。

11) 「経験の主体」用法で経験主体を明示する場合に、とりたて助詞ハが必要なもの、経験的動作において経験主体

に考えることができる。これらは（私という）経験主体の所有する「主観的な場（ドメイン）」に、経験対象が、それぞれ所有的、知覚的、能力的、感情的な存在（対象）として位置づけられ、存在するという形でとらえられたものである。このように経験的動作を認知主体の主観的な「見え」としてとらえると、主観的ではあるが存在の有無といった存在論的な把握となる<sup>12)</sup>。このようにプロセス的事態としては最も存在論的事態に近い経験的動作を日本語は存在論的にとらえ、言語化しているのである。

このようにプロセス的事態と存在論的事態のいわば境界に位置する経験的動作といったものを、どのように把握し、言語化するかで日英両語に差が生じている。プロセス的にとらえるのが英語であり、存在論的にとらえるのが日本語である。池上（1981）が英語を「スル型言語」であるとし、日本語を「ナル型言語」であるとしているのはこのようなことによる。スル型とは、事態を参与者とその動作（スル）としてプロセス的にとらえる把握の仕方を意味しており、ナル型とは、事態をその場に生起するものとして静的、存在論的にとらえるということである。また経験的動作を客観的にとらえてプロセス的に把握し、言語化するのが英語であり、主観的にとらえて存在論的に把握し、言語化するのが日本語である。池上（2000）で英語を「客観的把握型」言語、日本語を「主観的把握型」の言語であるとしているゆえんである。

## ◀ 参考文献 ▶

- 池上嘉彦（1981）「「する」と「なる」の言語学」東京：大修館書店。  
 池上嘉彦（2000）「日本語論への招待」東京：講談社。  
 金谷武洋（2003）「日本語文法の謎を解く：「ある」日本語と「する」英語」東京：ちくま新書。  
 国広哲弥（1986）「意味論入門」『言語』15-12：194-202。  
 菅井三実（2000）「格助詞「に」の意味特性に関する覚書」『兵庫教育大学研究紀要』第20巻第2分冊：13-24。  
 菅井三実（2001）「現代日本語の「二格」に関する補考」『兵庫教育大学研究紀要』第21巻第2分冊：13-23。  
 菅井三実（2002）「構文スキーマによる格助詞「が」の分析と基本文型の放射状範疇化」『世界の日本語教育』12：175-191。  
 杉村泰（2002）「イメージで教える日本語の格助詞」『言語文化研究叢書』1：39-55。名大言語文化部・国際言語文化研究科。  
 西村義樹（2000）「対照研究への認知言語学的アプローチ」坂原茂編『認知言語学の発展』145-166。東京：ひつじ書房。  
 堀川智也（1988）「格助詞「ニ」の意味についての一考察」『東京大学言語学論集88』：321-333。  
 森山新（2001a）「認知的観点から見たヲ格とニ格の意味・用法の違い」『日本語教育研究』4：19-28。高麗大学校教育大学院日語教育研究会。  
 森山新（2001b）「認知的観点から見た格助詞ヲ、ニの意味のネットワーク」『日本語教育研究』2：9-56。韓国日語教育学会。  
 森山新（2003）「認知的観点から見た格助詞ニの意味構造」『Foreign Language Education』10-1：229-243。韓国外国語教育学会。  
 森山新（2004）「格助詞ガの意味構造についての認知言語学的考察」『お茶の水女子大学人文科学紀要』57：51-66。  
 Bolinger, Dwight (1977) *Meaning and form*. London: Longman.  
 Langacker, Ronald. W. (1991a) *Foundations of cognitive grammar*. Vol.2. Stanford University Press.  
 Langacker, Ronald. W. (1991b) *Concept, image, and symbol. The Cognitive Bases of Grammar*. Berlin: Mouton de Gruiter.

はとりたてられない限り明示されないほうが普通であることを示していると思われる。

12) 日本語で所有を「ある」で表現するのも日本語が経験的動作を主観的に把握することの一つの現われであろう。

- 투 고 : 2004. 3. 30
- 심 사 : 2004. 4. 15
- 심사완료 : 2004. 5. 15

이러한 사실은, 이 시대의 문학이 어떻게 변모해왔는지, 그리고 어떻게 변모해나갈 것인지에 대한 중요한 단서를 제공한다. 이 시대의 문학은, 이 시대의 현실을 반영하고, 이 시대의 현실을 비판하고, 이 시대의 현실을 변화시키기 위한 노력을 하고 있다. 이 시대의 문학은, 이 시대의 현실을 반영하고, 이 시대의 현실을 비판하고, 이 시대의 현실을 변화시키기 위한 노력을 하고 있다.

이 시대의 문학은, 이 시대의 현실을 반영하고, 이 시대의 현실을 비판하고, 이 시대의 현실을 변화시키기 위한 노력을 하고 있다. 이 시대의 문학은, 이 시대의 현실을 반영하고, 이 시대의 현실을 비판하고, 이 시대의 현실을 변화시키기 위한 노력을 하고 있다. 이 시대의 문학은, 이 시대의 현실을 반영하고, 이 시대의 현실을 비판하고, 이 시대의 현실을 변화시키기 위한 노력을 하고 있다. 이 시대의 문학은, 이 시대의 현실을 반영하고, 이 시대의 현실을 비판하고, 이 시대의 현실을 변화시키기 위한 노력을 하고 있다.

2. 이 시대의 문학의 변모와 그 원인

이 시대의 문학의 변모는, 이 시대의 현실의 변화와 밀접한 관련이 있다. 이 시대의 현실은, 이 시대의 문학의 변모를 촉진하고, 이 시대의 문학의 변모를 반영하고 있다. 이 시대의 문학의 변모는, 이 시대의 현실의 변화와 밀접한 관련이 있다. 이 시대의 현실은, 이 시대의 문학의 변모를 촉진하고, 이 시대의 문학의 변모를 반영하고 있다.

이 시대의 문학의 변모는, 이 시대의 현실의 변화와 밀접한 관련이 있다. 이 시대의 현실은, 이 시대의 문학의 변모를 촉진하고, 이 시대의 문학의 변모를 반영하고 있다. 이 시대의 문학의 변모는, 이 시대의 현실의 변화와 밀접한 관련이 있다. 이 시대의 현실은, 이 시대의 문학의 변모를 촉진하고, 이 시대의 문학의 변모를 반영하고 있다.

이 시대의 문학의 변모는, 이 시대의 현실의 변화와 밀접한 관련이 있다. 이 시대의 현실은, 이 시대의 문학의 변모를 촉진하고, 이 시대의 문학의 변모를 반영하고 있다. 이 시대의 문학의 변모는, 이 시대의 현실의 변화와 밀접한 관련이 있다. 이 시대의 현실은, 이 시대의 문학의 변모를 촉진하고, 이 시대의 문학의 변모를 반영하고 있다.